

通信教育部メディアスクーリング
経済学（2017年度撮影）

経済学

（資本と利子から経済を考える）

第10回

法政大学 法学部
水野和夫

第10回目のテーマ

▶グローバリゼーションの論争

・・・ 転換派の主張

▶コペルニクス革命とグローバリゼーション

・・・ 「無限空間」と「有限空間」

転換派の主張－自由民主主義的ガバナンスへの挑戦

第4節 グローバリゼーションと領域的リベラル・デモクラシーの転換

「転換派」、
p.16

グローバリ
ゼーション
vs.リベラル・
デモクラ
シー、p.16-
17

「**転換派**」にとって、グローバルな地域的相互関連性の加速化は、自由民主主義的ガバナンスの形態への紛れもない挑戦を提起している。

リベラル・デモクラシーは主権国民国家の排他的で範囲の定まった領域内において、権力の位置に関する説明責任の原則に従って編成されている。

グローバリゼーションは、人間の経済的・社会的な組織の規模の点で甚大な変化を伴うので、相変わらず排他的で国民的・領域的基盤の上に組織されたままである既存の民主的な説明責任の諸形態を容易に乗り越えたり、回避して権力を行使できる。

民主的な政治共同体の同意や代表の原則への疑問

グローバリゼーションの帰結、p.17

グローバリゼーションの状況下では、大国の(非)決定と(非)行動はすぐに国境を超えたインパクトを獲得でき、地球上の人々の福祉と安全保障に影響を与える。

しかし、**民主的な説明責任の対応メカニズムには従っていない。**

グローバリゼーションの帰結として、民主的説明責任の領域的システムは、権力が及ぶ場所の範囲と必ずしも一致しなくなった。こうした状況のもとでは、**民主的な政治共同体(それは国民的、地域的、グローバルであるべきか)の同意や代表の原則や理念そのものが決定的に疑わしくなる(Held,1995)**。

新しい権力の創出

新しい権力
の創出、
p.18

自国内の内政を統制・管理する民主政府の能力は、その結果、**決定的に弱まった。**

これらの国境を超える活動を規制するためにIMF(国際通貨基金)からWHO(世界保健機関)に至る既存のグローバルで国際的な統治形態において、**新しい権力の集中が創出**されている。

この新しい権力は民主的信託を欠き、その上、各国家の民主的自律性を危うくする。この事実は、とくに欧州連合の場合に明らかである。

これらの状況では、自治的・自律的な「民族運命共同体」である自由民主主義国家一人民主権とふつう一致して統治される一の理念は、「真に存在した」歴史的な諸条件からやや外れているように思われる。

民主政治そのものの転換を促進

新しい進歩的政治勢力、p.18
「グローバルな市民社会」

「転換派」の結論

「転換派」はまた、グローバリズムが新しい進歩的な政治勢力や活動の出現にかかわっていると主張。

「グローバルな市民社会」の出現を示唆

1995年、国連世界女性会議（北京）

1993年、国連世界人権会議（529の国際非政府組織（INGO）を代表する約2721名が参加、ウィーン）

「グローバルな市民社会」とは、「個人の上に、そして国家の下に、しかし、国境を越えて」存在するこれらの組織、連携（アソシエーション）、運動を包括する用語（Wapner, 1995）

結局、転換派は、リベラル・デモクラシーが構築された基盤、すなわち主権的領域国家のウェストファリア秩序を浸食しつつ、グローバリゼーションが民主政治そのものの転換にも貢献していると判断する。

本日、第2のテーマ

- コペルニクス革命と近代・・・閉じた宇宙（コスモス）から無限の宇宙へ
- 21世紀、アフリカまで到達したグローバリゼーション・・・近代の前提が崩壊？

コペルニクス革命と近代国家

(1543年)『天球の回転について』
コペルニクス革命
地球を動かすこと
||
創造物の連鎖を動かすこと

1630年代※
科学革命
(デカルト、
ガリレオ)

ニュートン「万有引力」
『プリンピキア』(1687)

ケプラー「第一～三法則」
『新天文学』(1609)

「地中世界」閉じた世界⇒

1619年
イタリアの金利、1.125%⇒無限の「海の時代」

1651年
『リヴァイアサン』(霍ップズ)

〈近代主権国家の基本的属性〉

- ①多数の主権国家の存在。
- ②一つのシステムを形づくっているみなされるような、ある程度の相互作用が主権国家間に存在していること。
- ③一つの社会を形づくっているみなされるような、ある程度の共通規則と共通制度の承認。

(出所)『国際社会論』(ヘドリー・ブル)

コペルニクス革命の核心・・・宇宙論、物理学、哲学および宗教における概念上の変化

『コペルニクス革命』(上・下) (トーマス・クーン、原著1957、講談社現代文庫)

まえがき、p.3
コペルニクス革命とは

革命の革新は数学的天文学の変換だったが、同時にそれは宇宙論、物理学、哲学および宗教における概念上の変化をも含んでいた。

コペルニクス自身は数学的天文学の専門家で、一連の惑星の位置の計算に用いられる秘教的な技巧(テクニック)の修正にしか関心がなかった。

本書は、ハーバード大学の科学の「総合教育」コースのひとつとして、1949年以来毎年行われた一連の講義から生まれた。

コペルニクスの太陽に対する態度が、科学においてより芸術および文学において一層衝撃的だったルネサンスの伝統の集積的要素だった。

コペルニクス革命・・・人間の概念の転換

第1章「古代における二つの球の宇宙」、p.13

コペルニクス革命とは観念上の革命であった。すなわち、宇宙および宇宙と人間自身との関係についてのわれわれ人間の概念の転換であった。

1543年、ニコラス・コペルニクスはこれまで地球に課せられていた多数の天文学上の機能を太陽に移すことによって、天体力論の正確さと単純さを増大させようと提案した。

彼の提案以前には地球は固定された中心点であり、天文学者は恒星や惑星の運動の計算を地球を中心として行っていた。

1世紀後には、少なくとも天文学においては太陽は地球に代わって惑星運動の中心となり、地球はその唯一無二という天文学上の地位を失い、運動する惑星の一員となつた。

「科学革命」（バターフィールド）

「科学革命」とは
（『近代科学の誕生』バターフィールド初版
1949、講談社学術文庫）、p.13-14

「科学革命」とは、これは（「科学革命」）は、ふつう16、17世紀と結びつけられているが、実はもっと以前の時代にまで連続的にはさかのぼるべきものである。

この革命は、科学における中世の権威のみならず古代のそれをも覆した。

つまり、スコラ哲学を葬り去ったばかりか、アリストテレスの自然科学をも壊滅させたのである。

したがって、それはキリスト教の出現以来他に例をみない目覚ましい出来事なのであって、これに比べれば、あのルネサンスや宗教改革も中世キリスト教世界における挿話的な事件、内輪の交代劇にすぎなくなってしまう。

人間と宇宙・神との関係に影響を与えた

『コペルニクス
革命』(上)、
p.14

科学に対するこうした結果でさえも「革命」の意味の全てではない。

コペルニクスが生き、かつ研究を行なったのは、政治的および知的生活における急激な変化が、近代ヨーロッパおよびアメリカ文明の基礎を準備しつつある時代であった。

彼(コペルニクス)の惑星理論および彼が採った太陽中心の宇宙観は、中世から近代西洋社会への時代の流れにおいて力があった。

なぜならそれは人間と宇宙および神との関係に影響を与えるように思われたからである。

宗教、哲学および社会理論におけるすさまじい論争

『コペルニクス革命』(上)、
p.15

コペルニクスの理論ははじめは古代天文学の厳密に技巧的および高度に数学的改定として出発したが、次第に宗教、哲学および社会理論におけるすさまじい論争のひとつの焦点となった。

それはアメリカ大陸の発見に続く2世紀間、近代精神の進路を示した。自分達の住む地球が無数にある恒星のひとつのまわりをやみくもに回転してゐるひとつの惑星に過ぎないということを信じる人々は、地球を神の創造における唯一無二の焦点とみなす先行者と比べ、宇宙における自分たちの位置についてまったく異なる評価をした。

現代の西洋文明は日常の哲学およびパンの両方において、過去のどんな文明よりも、科学上の諸概念により多く依存している。

地球を動かすこと＝創造物の連鎖を破壊

『コペルニクス
革命』(上)、
p.168

トマス・アクイナス(1225年頃～1274年)「キリスト教的宇宙においては神が唯一の眞の無変化の物体であり、地上および天上のすべての変化は神に由来している」。

p.173

『神曲』(1304–1321年)においては「全ての主題のうちで最も重大なもの、すなわち人間の罪と救済の主題は、壮大な宇宙のプランに合うように調整されている」。

p.174

ひとたびこの調整がなされてしまうと、宇宙のプランにおけるどんな変更も、キリストの生およびキリストの死に必然的に何らかの影響を与えるだろう。

地球を動かすことは、創造物の連鎖を破壊するということになつた。